

2014年5月7日

日本真珠輸出組合  
理事長 清水勝央 様

DOCOMOMO Japan  
代表 松隈 洋



日本真珠会館の保存・再生要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20世紀の建築遺産の価値を認め、その保存を訴えることを目的の一つとする国際的な非政府組織 DOCOMOMO (Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement : モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査および保存のための組織)の日本支部です。

さて、貴組合におかれましては日本真珠会館の解体をご検討中である旨、聞き及んでおります。

ご承知のように、日本真珠会館は戦災復興ただ中の1952(昭和27)年に、戦後の真珠産業振興を目的に、兵庫県税と県下真珠関連企業の寄付により建設されたもので、その設計は、自治体営繕部門として独自の設計活動を展開したことで知られる、同県営繕課の技術者・光安義光を中心とした兵庫県営繕課によります。

日本真珠会館は、その建築史的な重要性によって本会が2003(平成15)年に選定した日本を代表する歴史的に価値のある近代建築の100選の一つに選ばれています。この100選のなかには、2006年に国の重要文化財に指定された広島ピースセンター(広島市、1952年)や、同じく重要文化財の山邑太左衛門邸(ヨドコウ迎賓館、1924年)などが含まれています。日本真珠会館も同様に、戦災復興と将来の発展を目指して戦後日本がいかに努力を重ねてきたかを理解するうえで、建築設計という領域における重要な歴史的建造物であり、兵庫県や神戸市の歴史を物語る貴重な地域資源と言えます。

日本真珠会館は、以下の点で保存すべき建物と考えられます。

1. 兵庫県営繕課(設計担当:光安義光)の代表作であると同時に、1950年代日本におけるモダニズム建築思想を具現化した建築物であること

日本真珠会館は兵庫県の真珠産業振興施策の一環として計画されました(後述)。したがって、その設計は兵庫県営繕課で行うこととなり、その中心的存在が光安義光(1919-99年)です。彼はのちに営繕課長となり、「県の施設は県が設計する。外注はしない」という「建築家集団としての官庁営繕」哲学でこの組織を牽引した人物です。現在の兵庫県庁舎

群の始点となった第一号館（1964年）は、その集大成です。

県の施設の多くがいまだ木造建築であった戦後初期において、日本真珠会館は県営繕課が手がけた鉄筋コンクリート造建築の初期の例で、その機能、構造、造形とが融合した点において、1950年代日本のモダニズム建築の到達点を示すものであり、日本の近代建築史上、重要な存在です。

竣工当初の建物は、地下1階、地上4階。1階にロビーと管理関係の諸室、2階に事務室と食堂、3階に事務室、そして4階に真珠交換室という配置でした。事務室には真珠関連企業の出張所や水産省神戸真珠検査所、最上階南面全部は品評と入札が行われる交換室で、これは今日でも同様と聞いています。

日本真珠会館の建物が、日本における戦後モダニズム建築の高いレベルを体現している最たる点は、その用途と空間が、線・面・色の抽象的立体コンポジションにまとめ上げられている点にあります。薄いスラブ（床版）や袖壁は、南立面では明快な線として現れ、東立面に廻ると閉じた大きな面を構成しています。1階の壁は御影石による一様な黒い面となっており、オフィスビルの格式を控えめに主張しながらも、上階の軽快な浮遊感を高めています。上層部の壁を構成する浅葱色と白色のタイル貼りの壁に透明ガラスが加わり、その各面に、細く伸びやかな手摺の水平線と繰り返される窓の方立ての垂直線が、リズムカルな秩序感を与えています。

このようなモダニズムの抽象的な造形感覚は、戦前期に萌芽があり、戦後に開花したと見ることができます。設計者の光安義光は、1942（昭和17）年に東京工業大学建築学科を卒業すると同時に兵役につき、1947年に復員します。その彼が捕虜として終戦を迎えたビルマ（現ミャンマー）の収容所で粗末な紙に描いた小さな抽象画が残されていますが、日本真珠会館は、あたかもこれを立体化したようなたたずまいがあります。すなわち日本真珠会館は、日本におけるモダニズムが、戦後初期の社会状況と技術環境においてどのように具現化したかを雄弁に物語る存在なのです。

光安はこの建物竣工時に次のように書いています。「国際環境にあるため、官僚臭のない品格ある表現が必要である」（「県立日本真珠会館の設計について」『兵庫県建築士会会報』1953年1月）。輸出産業としての国際的な飛躍、その拠点としての国際都市神戸を念頭に置きつつも、神戸旧居留地にかつて建てられた威厳を誇示する大資本ビルとも、またいかにもお役所建築というものとも異なる、新しい「品格」を求めた結果が、日本真珠会館が体現するモダニズムだといえます。

## 2. 兵庫県ならびに神戸市の戦後建築を代表し、神戸旧居留地の歴史的地区の豊かな文化蓄積にかけがえのない建築物であること

日本真珠会館は神戸旧居留地の東南端に立地しています。居留地時代には“HIGASHI MACHI 122”と称された一角です。居留地が解消されて後、この地域の整備された街区に

は、大正期から昭和戦前期にかけて金融や海運などの内外大資本が進出し自社ビルの建設が相次ぎました。今日、「神戸旧居留地」の主たるイメージをかたちづくっているのは、こうした建物群かもしれません。

しかし、神戸旧居留地の文化蓄積が戦前期までに限られているわけではもちろんありません。戦後に三宮地区が神戸の行政／ビジネスのセンターとして急速に発展し、神戸随一のメインストリート「フラワーロード」が成立するにともなって、隣接する旧居留地の東端地域は、格式の高いビジネスエリアとして発展しました。それにともない、この地域には、他に先駆けて戦後の本格的な鉄筋コンクリート造のオフィスビルが建設されました。このように、旧神戸居留地には明治期から戦後の復興・成長期に至る機関を通して、各時代状況を反映した建築物が建設され、集積することになりました。

日本真珠会館が竣工した 1952（昭和 27）年当時は、三ノ宮駅周辺には焼け跡に急ごしらえのバラック建築が密集し、「フラワーロード」を挟んで現在の市役所に対面する一帯は接收解除直後のイーストキャンプ跡地で、まだ進駐軍兵舎が残っていた時代です。そのような焼け跡を引きずる都市環境に姿を現した日本真珠会館の晴朗なモダンスタイルは、開港以来の神戸の近代化の歴史を物語る上で、戦災復興を象徴する存在です。

一方、観光をめぐる話題では、神戸の「ハイカラ」な印象がしばしば言われ、好適な図像として旧居留地の西洋館や洋風オフィスビルディングがしばしばとり上げられてきました。それは文明開化以来の洋風イメージですが、その後の近代化過程は、当然のことながら「ハイカラ」だけで語れるものではありません。時代が下り、歴史の蓄積が厚くなるにつれ、私たちは、時間の層が彩なすより多様で豊かな文化を欲するようになっていきます。近年、近代化遺産としての産業遺跡や、戦前・戦後のモダニズム建築が注目を集めていることは、その証左といえるでしょう。また、より若い世代には、1970～80 年代の建物や都市景観を歴史的に相対化して眺める視点も醸成されています。こうした趨勢において、日本真珠会館の建築文化的価値は、さらに高まっていくと思われまます。

### 3. 地域の産業文化と建築文化の結びつきを象徴する建築物であること

日本真珠輸出組合は、1981 年以来「パールシティ神戸」と銘打ち、神戸の真珠関連産業の振興を推進してこられました。このネーミングはたしかにこのときに始まりますが、真珠と神戸の結びつきはさらに長い歴史を有しています。それは、真珠養殖の本格化に先駆ける大正期の模造真珠製造業、養殖場の多い西日本産真珠の集散地、真珠選別や加工に適した地理的条件、海外取引を担う外国人貿易商の存在などです。水と女性に結びつけられた月のシンボルとして、洋の東西を問わず古代より人びとを魅了してきた真珠ですが、そのエレガントな印象も、こうした近代産業発達史に支えられており、神戸との浅からぬ縁があることを知るとき、この地域で暮らす私たちは、真珠というものに、その近寄りがない高貴な存在感とはべつに、ある種の親しみを覚えるのです。

日本真珠輸出組合は、1964（昭和 39）年に『真珠のあゆみ』をまとめておられます。こ

これは日本真珠産業発達史の1,113ページにわたる大冊で、その詳細な叙述には、編纂に関わられた方々の真珠産業に対する愛と、先達の努力を後世に伝えたいという使命感に満ち、歴史を学ぶ者として頭が下がる思いです。

同書によって戦前・戦中・戦後の時代状況に翻弄される業界と関係者の奮闘を知ることができますが、日本真珠会館との関わりでとりわけ印象深いのは、サンフランシスコ講和条約発効（1952年4月28日）前後の、次のような状況です。

戦前に真珠関連企業合同体として設立されていた日本合同真珠株式会社は、1947（昭和22）年にGHQから閉鎖機関に指定され、本邦内における業務停止と財産の清算を命ぜられます（閉鎖機関令）。この過程で、同社株主である在神戸真珠関連企業は、県に納付する税金を真珠産業振興施策に活かすよう陳情、1951（昭和26）年4月の県議会で日本真珠会館の設立が可決されます。会館の建設費用には、県費から6000万円、真珠業界からの寄付2000万円が当てられたといえます。

このことから、日本真珠会館は、業界の先達の先見性によって誕生し県民とともに存続してきた歴史的存在であることがわかります。そして、前述した設計者・光安義光の意図である「官僚臭のない品格ある表現」もまた、この点に基づいていることが理解されるのです。

こうしたことをふまえるならば、日本真珠会館は「パールシティ神戸」を名実ともに象徴する建築物であると言えます。

以上のことから、貴組合におかれましては、このたびの計画に際し、日本真珠会館の建築的価値を十分に認識いただき、かけがえのない文化遺産として後世に継承していただけますよう、深甚なるご配慮を賜りたく存じます。

兵庫県と神戸市の戦後の復興と発展を象徴し、産業と地域との強い結びつきを背景にもち、自治体営繕部門の実力が遺憾なく発揮されて日本の建築史に大きな存在感を示している日本真珠会館を保存しながら活用することは、この地域の、ひいては日本の都市の歴史をさらに厚みのある豊かなものにするとと言えます。

なお、本会はこの建築の保存に関して、技術的支援などできます範囲でお手伝いさせていただきますと考えておりますことを申し添えます。

今後とも、この優れた由緒ある建築と環境の保全に、ご理解とご協力を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

敬具